

樹氷

暗いはしけ

五木寛之

ソフィアの秋



五木寛之

ソフィアの秋

文藝春秋

ソフィアの秋

五木寛之作品集 5

1973年2月20日第1刷

著 者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 本／大冢製本印刷株式会社

定価 470円

© 1973 Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

0393-512050-7384

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第五卷／目次

ソフィアの秋

5

暗いはしけ

37

樹氷

85

解説 川崎 洋

305

ソ
フ
ィ
ア
の
秋

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル

カバー・表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

ソ
フ
ィ
ア
の
秋

△一九六八年九月発表◇

1

「ヘミネルバ茶房」は、大学の近くにある風変りな喫茶店である。文は人なり、という文句の本当の意味を何かの本で読んだ事があるのだが、忘れてしまった。そんな事はどうでもいいのだ。ぼくが考えているのは、店もまた人である、という事なのだ。ヘミネルバ茶房は、取りもなおさず、その店主であるところの影山真陽氏の、人柄そのものの象徴といえる店だった。

ぼくらの大学は、東京で辛うじて一流の末席をけがす程度の私立大学である。ぼくが進学に際してその大学を選んだのは、格別な抱負や、志があったからではない。苦手の数学が入試科目の中に含まれていなかったという、

ただそれだけの単純な理由からだった。もともとぼくは、画家志望だったのである。中学時代からすでに研究所へデッサンの勉強に通ったり、高校時代は美術部の副部長を勤めたりしたものだ。だが、高校三年になった頃から、自分の画家としての才能に疑いを持ちはじめて、芸術家への道を断念した。それにはいろいろな理由が複合的にからみあっているが、要するにぼくは自分が物を創り出す作業に向いていない、という事を発見したためである。自分で何かを創造するより、ぼくは他人が作ったものに関して、様々な意見を吐くことの方が楽しくもあり、またきわめて的確にそれらの長所欠点を指摘する事ができた。つまり、画家よりも批評家的な才能に恵まれていたというわけだろう。まあ、本当の所を言えば、ぼくが怠け者であるという、ただそれだけの事かも知れない。ぼくには、たった一人で一日数時間もアトリエにこもり、作品と孤独な格闘を続ける意志力と、体力に欠けていた。ぼくはいつも一杯のコーヒを前に、とりとめのない無駄話や、時には芸術談議で日を過すのを好んだし、またそういった面での才能——無駄話をして怠ける事が才能

といえるかどうかは別として——つまりそういった話で人を感じさせる能力が、自分にそなわっているように思われた。仲間や、時には先輩の多少は名前の知られた画家たちも、ぼくと雑談する事を喜んだし、また、進んで自分の近作を見せて意見を求める者も少なくなかった。

自分で言うのもおかしいが、ぼくには一種の動物的な第六感のようなものがあつたように思う。一見、目立たないものの中に、ちらと光る才能、また本物だけが持つている或る独特の雰囲気、そういったものを敏感にキャッチするアンテナが、人よりは多少発達しているらしかった。もちろん、たいした話ではない。人より多少、という程度の事である。

と、いうわけで、ぼくは十八歳のある夏の朝、天啓の如くにひらめいた考えにすがって美術批評家、もしくは美術学者になろうと決心したというわけだ。

何とか一夜漬けの勉強でQ大学にもぐり込み、芸術学科美術専攻の学生となつてからは、大威張りで怠けて暮らした。もう高校の頃のように、一日十三時間もキャンパスに向うという美術部の後輩に劣等感を持つ必要もな

くなつたし、画材の費用に悩む事もなくなつた。

日がな一日、大学の裏手の「ヘミネルバ茶房」にとぐろを巻いて、昭和元祿の泰平をエンジョイして過せばいいのである。そんなぼくにとつて、「ヘミネルバ茶房」は、文字通り、「私の大学」だつたと言つていい。

最初この店を訪れた時、ぼくは余りの美意識の混乱ぶりに、軽い目まいを感じたほどである。大学の塀にそつたバス道路から、T字型に通っている露地の、突き当りにその店はあつた。ちよつと見ると高級なおでん屋か、良く言つてもせいぜい新宿あたりの郷土料理の店といった造りである。

民芸風の白壁と、黒い木の格子が目立つ平屋で、入口はドアでなく太い棧のついた障子になつていた。障子紙には何というのか、中風の老人に書かせたような奇妙な墨の字で、「ヘミネルバ茶房」と書いてある。後でそれが当店の主人、影山真陽氏自慢の隸書（れいしょ）という字体だと知つた。

障子を開けると、中が土間になつてゐる。八畳か十畳位の部屋で、中央に四角ないろりが切つてある。客席は

それを囲んで、壁際に取りつけの長椅子になっていた。

久留米^{グズリ}絨の表のついた薄っぺらなざぶとんが、その上に並べてあり、そのざぶとんの裏には「ヘミネルバ茶房」と大書した白い布が縫いつけてあるのだ。灰皿が置いてないので、代りにそのざぶとんを持ち去る客が多く、店主の真陽氏はいかにそのような自衛手段に出たのだという。

その部屋の壁は、全部、造りつけの本棚になっていた。並べてある本は影山真陽氏の蔵書をそっくり移したもので、和洋古今、実にさまざまな種類の本が並んでいた。

古い皮表紙に金文字を押した近代戯曲全集や能楽全書に混じって、「君の名は」や「洋酒カクテル読本」や「マゾッホ研究」や「みそぎの哲学」などという本も並んでいる。

文学書、美術書、マルクス全集からユンク全集、花札の遊び方、株で損をしない法、毛沢東選集、タンゴの歴史、円朝全集、会津八一研究、と何でも揃っているのだ。

客は勝手に本を引っぱり出して、読み終ると棚に返しておく。さすがに本は失くならないと見えて、真陽先生の蔵書印だけが見返しに押してある。

その書庫のような部屋の奥に、障子をへだてて、もう

一つの和室があった。そこは同人雑誌や、小さな研究会の会場に使える部屋で、使用中には店の扉の所にボール紙の札がさがる。「文学誌・凍河同人会」などと、読みにくい書体で書かれた札が風に揺れているのだ。

その和室と書庫ふうの部屋の両方に連なって、カウンターがあった。ふだんは和服の着流しの真陽氏が、郷里の山口県から呼びよせたという頬の赤いリスのような少女と二人で中にはいつているのだ。コーヒーを入れたり、皿を洗ったり、十字のたすきをかけた真陽氏が、指先まで黒い剛毛の密生した腕を見せて狭い空間で働いているさまは、どこか檻の中の熊に似ていないでもなかった。

ぼくが「ヘミネルバ茶房」にはじめて顔を出したのは、たぶん大学に入學した年の夏だったと思う。夏休みの最中で「ヘミネルバ茶房」もほとんど客がいなかったようだ。

最初の印象は、きわめて悪いものだった。夏期講習の帰りに寄ったぼくには、客が店に入ってきててもじろりと眺めるだけで、いらっしゃいませ、とも言わぬ変な店主が目ざわりで仕方がなかった。それだけではない。その店の様式、装飾、その他のすべてが強い違和感を覚えさ

せたのである。

「マスター」

と、その時、ぼくは呼んだのだ。その日に限って真陽氏は白いステテコに丸首のシャツという風体で、カウンスターの中にいた。少し縮れた髪をなでつけ、黒い総々とした眉毛と、顎ひげを指先でひねりながら、その人物は知らん顔をしていた。大き過ぎるほど大きな顔で、体格もよく、たぶん昔の熊襲くまそという種族はこんな感じだったろうと思わせる男である。

「冷いコーヒーをくれよ、おじさん」

と、ぼくは言った。その時はじめてその男はぼくを振り返って低音で言った。

「わしはこの店主だ。影山真陽。みんなは影山さんと呼んぞる。マスターだの、おじさんだのと変な呼び方はしちゃんらん」

こちらをにらんだ目玉が異様に光るので、ぼくは驚いて謝った。

「コーヒーを下さい。影山さん」

「冷いコーヒーを入れてやんなさい」

と、主人は女の子に顎をしゃくって言った。そしてカウンスターの下をくぐって、思いがけぬ素早い身のこなしで出て来ると、ぼくの隣に坐って意外に優しい声で言った。

「あんた、夏期講習を受けに来とるのかね。文学部じゃろう。専攻は何？」

「美術です」

ぼくは少し後ずさりしながら答えた。影山さんの口から、呼吸とともに強いニンニクの匂いが迫って来たからである。

「美術か。ふうん。いちばん役に立たん所にはいったもんだな」

「役には立ちませんね」

と、ぼくは相づちを打った。美術を勉強した所で、卒業してすぐ美術評論で食えるという可能性はない。新聞社か放送局か、それとも出版関係の会社を受けるか、或は郷里の九州に帰って伯父が理事をしている女子短期大学の講師をやる位が、ぼくの将来の可能な道だった。四十歳位までに外国の美術書の翻訳を一冊出すか、または

郷土出身の画家、青木繁の伝記でもまとめるか、その辺が率直に言って自分の能力の限界なのだ。ぼくのような者には、新人のグループを作って芸術運動をやるなどというエネルギーはなかった。

「役に立たん勉強をなぜやるんだ」

と、影山さんは重ねてきいた。

「まあ、嫌いじゃないからでしょう」

「なるほど」

影山さんは二、三度ふとい首を曲げてうなずくと、

「わしも若い時は美術に関心があつた。彫刻家か、舞台美術家をめざしておつたんだが」

ぼくはコピーを運んで来た少女の、形のいい白いしまった脚を横目で眺めながら、適当にうなずいた。

「なぜそれを断念したか。そいつを話せばあんた、それだけで一篇の小説が書けるかも知れん。うん。こないだ何とか賞をもらった作家の高原明三な、あの男も学生時代はよくこの店に出入りしとつたもんだ。こないだちょっとした文壇関係の会で会ったら、彼、言うとしたね、うん。影山さんの話を一度、書いてみたいとな。うん」

「そうですね」

ぼくはカウンターの向こうに隠れた少女の脚の残像を、なおも未練がましく追いつづけていた。彼女はまだ女学生のようにいて、そのくせひどく迫力のある大きな乳房を持っていた。

「ん？」

影山さんがぼくの視線の方を振り返ったので、ぼくはあわてて彼の顔に目を向けた。

「なるほど。くさっても美術の学生さんだ。目が高い、うん。あれに気づきなさったか」

「はあ？」

ぼくは、顔一面に喜悦のしわを浮べながら目を細めている影山さんを驚いて眺めた。

「ここに来る芸術青年も少くないが、あれに気づく人は余りおらん」

と、影山さんはカウンターの方を振り返って、どこかゆるんだような声の調子で喋り出した。

「ヴェネツィアン・グラス——。ヴェニス硝子^{ガラス}、と言ってしまえば何となく風情がなくなる。あれは、わしが四

十六歳の夏、イタリア旅行の際にムラノ島の島民の台所から発見して持ち帰ったものだ。うん。もちろん偽物じゃない。十七世紀初頭の品だと国立博物館の武蔵技官が保証してくれた本物さ。しかし、何だな。おたくは若いかなかなかの目を持つてゐるね。うん、ちょっと手に取って見てみるかな」

ぼくはその時、ようやく影山さんが何を勘違いしているかに気がついた。ぼくはカウンターの中の少女の胸に、ぽかんと見とれていたので、彼はぼくが彼女の頭の上の棚を眺めていると思つたのだ。

言われて見れば、その棚には綺麗なガラスの水差しが一つ、飾つてあつた。古いランプのぼやの形をした胴体に、細い彎曲した取っ手と、薄く左右に拡がった台のついた、どこか異教的な感じのする水差しだった。縁や取っ手には金線が封じ込めてあり、鮮かな赤褐色の胴体が官能的ともいえる曲線を示していた。

「ヴェネツィアン・グラス——ね」

ぼくは慌てて、さも感に耐えぬ口調で呟いたのだ。

「見事なものです」

「あんたはわかる人だ。うん」

影山さんはいっそう感激してぼくの膝を叩き、立ち上つてその水差しを持つて来た。

「見てごらん。この華やかな赤の明るさ。取っ手の線の何という優美さ。イタリアの日光と、橄欖の芳香が匂い立たんばかりの美しさではないの。わしが北部イタリアを訪れた時は、わし自身もまだ若かつた。年は取つてたが気持は青年だった。ヴェニス硝子の発祥の地といわれるムラノ島まで、わしはこの美しさを求めて旅をしたんだ。そしてこれを見つけて持ち帰つた。だが——」

影山さんはそこで言葉を切り、ぼくの掌にその水差しを乗せて嘆ずるように大きな溜め息をついた。

「盲千人とはうまい事を言つたもんだ。こいつをそこに飾つておいて、これに気づく客はほとんどいないんだからね、君。学生は仕方もなくろう。だが、大学の教授たるもの、まして文学部の教官たちが誰一人としてこれに触れないというのは一体どうなつておるんかね。うん。

あんたが最初だ。いや、本当に。ちらちら眺めてた客も中にはいたよ。だが、あんたみたいに、まるで惚れた女

でも見るみたいに、よだれでもたれそうな顔でこいつに見蕩れた人はいなかったよ。うん。あんたはわかる。わかるねえ」

ぼくは口に含んだ氷のかけらを、照れかくしにガリガリ噛み砕きながら、掌の上のヴェニス硝子の水差しを眺めた。そして必死で以前に調べた事のあるヴェニス硝子についての知識を思い起こそうとつとめた。ぼくは分析力には欠けたかも知れないが、記憶力はあるほうなのだ。一度どこかで読んだり聞いたたりした事柄は、不思議によく覚えていた。

ヴェニス硝子は十三世紀頃にヴェニスを中心として起こり、十六世紀から十七世紀にかけて異常な発達をとげた。当時がヴェニス硝子の黄金時代で、特に色彩美に優れ、豪華な官能美にあふれた工芸品を生んだ――」

ぼくはしかつめらしく水差しを手の上で逆さにしたり、指で胴のふくらみをなでたりしたあげく、言葉少なに言った。

「十六世紀ものでしょう。この辺のふくらみに東方ビザンチン風の味がかなり濃厚に表われているようだ」

「わかるねえ、あんたは。うん。わかる」

酒と美女をあたえられた熊襲くまざとの酋長のように、影山真陽氏は相好をくずしてぼくの膝を叩いた。ぼくがヘミネルバ茶房のVIPとしての資格をあたえられたのは、その時からなのだ。

2

大学の講義は、ぼくを眠たがらせただけだった。ぼくはその年度の終りまでに、数えるほどしか正規の授業には参加しなかった。デモに加わったり、仲間と小さな芝居を手伝ったり、女子学生に惚れたり、振られたりして最初の一年間が過ぎた。ぼくは学校に来た時は必ずヘミネルバ茶房に立寄り、棚の本を入口の左端から順々に読んだ。どういう種類の本を読むとか、何の目的で読むとかいった事は関係がない。ただ順番に左端から片づけて行ったのだ。ぼくがインパール作戦の経過を憶えたり、菜根譚なんこんを暗記したり、南方熊楠や、ブランキの名前を知ったりしたのも、そのお陰である。ぼくは一杯のコーヒ

ーを前に、午後中ずっと、時には夜までい、ろりの前の久留米耕のざぶとんに坐って動かなかった。古い戦前の「改造」をめくってみたり、同級生を相手にガウディの建築について論じてみたり、影山さんと腕相撲をやったりして日を過した。ぼくは中肉中背で、影山さんより体格では劣っていたが、腕相撲では互角に闘う事ができた。ぼくが二十歳、影山さんが五十歳という年齢の差を考えると、むしろ影山さんの健闘をたたえるべきだろう。彼はぼくらと全く同じ次元で議論したり、笑ったり、怒ったりした。ぼくら学生たちは、影山さんがある面では煙たく思い、ある面では敬愛していた。少なくとも、時には彼に頼めば一日の食費位は、名前もきかずに貸してくれたのだから。

影山さんの生い立ちや、経歴を、ぼくは知らない。判っていることといえば、彼が大学には行かなかったこと、独身で店の奥の部屋に寝泊りしていること、相当の不動産を都内のあちこちに持っていて、ヘミネルバ茶房は一種の道楽だったことなどである。彼は少なくとも、ぼくら学生の年長の友人ではあった。学生運動の活動家た

ちが、時たまカンパを求めたり、劇団の女の子が切符を押しつけたりすると、多すぎず少なすぎない微妙なところで、それに協力してやっていたようだ。影山真陽氏は、人間としてはかなり幸福な部類に属する人ではないか、とぼくは思う。だが時に彼も不幸そうな顔をする事がある。そんな時、影山さんは仔熊を見失った親熊のような哀しげな感じになった。それは、ごくまれに蔵書が無断で持ち去られたり、金を借りて返しにこない学生がいたり、また、影山さんの知らない単語をぼくらが使ったり、夏休みや冬休みが近づいて来たり、つまり、そんな時に彼はやるせない感情におそわれるもののようなのだ。

だが、おおむねヘミネルバ茶房をめぐる若い学生たちは影山さんを失望させなかった。ぼく自身は店主・影山真陽の最も近い友人としてヘミネルバ茶房に十年一日の如く通い続けた。

ぼくが大学に入って二度目の夏が近づこうとしていた。学校の構内の銀杏並木は青黒いまでの葉の重なりを作り、デモの歌声も少しずつ細くなって行った。夏休みを待たずに帰郷する学生と、海や山へエスケープする連中がふ